

2-13

演題	特養からの卒業
副題	～私たち入所施設職員にできること～

在宅生活復帰
排泄支援加算

法人名	社会福祉法人 道志会
施設名	道志会老人ホーム

発表者名 (職種)	山崎 進太郎 介護職員
共同発表者	川村 弘貴
共同発表者	永井 優
共同発表者	木村 彩加
共同発表者	菊地 舞子

都道府県	神奈川県
住所	綾瀬市早川城山 2-11-3
TEL	0467-76-3399
FAX	0467-70-4770
メールアドレス	dsknh3399@gmail.com
URL	http://www.doushikai.or.jp/doushikai-home/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	社会福祉法人道志会老人ホーム 施設理念 「福祉は愛」 入居者定員 本入所 90 名ショートステイ 10 名 3フロアで軽度・重度・認知症で分けられており、それぞれの専門的知識や技術の習得と専門性に特化するために分けられております。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

ご利用者自身の自宅へ帰れることへの希望や、好きなことをして過ごしたいとの思いがあり卒業となった。最後の受け皿・終の棲家と言われている特養でも退所し自宅へ帰ることや自由があることを知ってもらうため、このテーマとした。

取り組んだ課題

本人が家に帰ることを望んでいた。職員はその実現を課題とし、施設で可能なリハビリや生活環境の整備を検討し実践した。

具体的な取り組み

- 自由のマネジメント
自由に過ごすためにご利用者本人とご家族と2つの約束をした。内容として、腎不全で体調が悪化しないよう、体調管理をするため療養食(減塩)、おやつなどの食事制限を行うこと、椎間板ヘルニアがあるため、歩行の際は無理をしない約束をご利用者本人とご家族と定め、それ以外の制限は設けなかった。
- ご利用者家族との信頼関係構築
御家族はご利用者本人の事を想い、対応が難しい要望も多くあった。そのたび臨時カンファレンス開催し嘱託医、職員からの報告を行って、ご家族と密にコミュニケーションをとった。コミュニケーションを取っていく中でご家族の姿勢が軟化し信頼関係が築けた。
- 自己リハビリ
毎日、本人自らシルバーカーや手すりを使用した歩行訓練を実施していた。ご本人がお休みしているときは、職員から体調確認の声かけを行っていた。
- 卒業を見越してのリハビリ
ご自宅には12段の階段があるため、機能訓練指導員と連携し、12段目安に非常階段を使用した昇降運動を行った。
- 生活リハビリ
衣類の管理・衣類の着脱・排泄・移動・離床などをご自身で行っていた。また、職員は最

大限介助を行うことを避け自立支援を行った。

活動の成果と評価

- 介護度が更新ごとに4→3→2と改善され卒業となった。ご家族と共に暮らすことができ、自宅復帰が叶った。
- 退所時加算を算定することができた。
- 他の卒業されたご利用者のケースから、ご家族の中には、自宅復帰を望まれないこともあることがわかった。
- 特養での卒業が実現したことで、職員のモチベーションUPに繋がった。
- 施設での自立と施設外での自立の違いが浮き彫りになった。

今後の課題

- ご利用者様とご家族様の意向をすり合わせ、必要・最適なケアを模索し実践していく。
- ご家族へ自宅復帰のみならず、外泊・外出へ踏み出せるような勇気づけをすること。
- ご利用者様が自宅復帰可能な方に関しては、生活環境をご家族様と共に考え構築していくこと。
- 地域の生活を想定したりリハビリの模索と実施をしていくこと。